

---

# 竜の少年

津田花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の少年

### 【Nコード】

N5103C

### 【作者名】

津田花

### 【あらすじ】

あたしはシーナ！伝説の魔法使いの血を引く者。でも落ちこぼれ。姉様達はもう一人前になって仕事も持つてゐるって言うのに、あたしにできる魔法はたった一つ…。

「何なのこいつ？」

あたしは子どもが嫌いだ。

うるさいし、すぐ泣くし、生意気だし…。  
拳げだしたら切りがない。

そんなあたしが今、目にしているもの。

それは魔物を退治する子ども。

まあ、魔物を倒すことは問題じゃない。

一年間慣れ親しんだ我が家が、突然壁から入ってきた魔物と、引き続きやってきた少年によって半壊しているこの状況が問題。  
招待した覚えはない。

あちこちにあいた穴から時々見える魔物と少年。

あたしにとつてはどっちも魔物。

小さな家だけど、結構気に入ってた。

もつと頑丈に作ればよかった？

「おまえ、もしかして鱗うろこもってる？」

魔物をやつけたのか、家から出てきた少年。

初め見たときは、透き通るような青い髪に驚いた。

その髪は今やクシャクシャで木くずをつけ、息も衣服も乱している。  
そんなにがんばってまで魔物が倒したったの？

「偉そうに…人の家壊しなんて何!？」

まず謝って!!

あたしの肩にも満たないような背格好でなによ？

「また魔法でも使って直せばいいだろ？その瞳め、魔力を持つ者の瞳

だ。」

確かにあたしの瞳は黄金だ。  
でも、それは関係ない！

「あのねえ、いくら魔法で直しても前と同じようには出来ないの！  
！簡単に言わないで！君、思い入れて知ってる？」

少年はあたしの顔を見て明らかに馬鹿にして笑った。  
もう絶対許さない！！

「あんた、あたしをなめてるでしょ？」

腹の底から出た声。

「全然？」

これだから餓鬼はっ！！  
なによ！その勝ち誇った顔！！

その時、よろよろとあたしの家から這い出た魔物。  
何で倒してないの？

でも、さっきより小さい。

…小さい？

何で小さくなるわけ？

「シーナ！無事か？」

突然、地面に無数に転がっている粒の二つ二つが、煙のように、あ  
たしが一番見たくない人を象る。<sup>かたど</sup>

「父様！」  
とうなま

この一年連絡なんてしてこなかったのに。  
やっと解放されたと思ったら、やっぱり何か仕掛けてたんだ。  
今連絡してくるなんて。

「説明は後だ。召還する。」

結局これだ。

「はい。」

足下に現れたおなじみの魔法陣。

上級者にならないと魔法陣なんて作れない。

その父様の魔法陣が少年の足下にもあるとは気づかなかった。

二、もうあたしの運命どうなってんの！？

ばかでかい家。

中にはあたしのいた部屋に、姉様や妹のいた部屋。

父様の仕事部屋に母様の占い部屋。

メイドさんの部屋に使ってない部屋。

慌ただしく行き交う人々。

ここにいたのがすごく前の事みたい。

その懐かしの本家、父様の仕事部屋であたしは衝撃の事実を知る。

「この少年が伝説の人間？あの昔話のですか？」

どう見ても人間には見えない。

透き通る青い髪に同じ瞳。

色素の薄い肌。

それに人間はもっと醜いと教えられた。

本人は話の内容をつかめずきょとんとしてるし。

「そうだ。バテバリーギ様と戦い、石にされた元人間の竜、君だぜン。」

何で名前知ってるの？

そんな有名な話だったわけ？

「でも五百年も前の話でしょ？」

今更そんな…。

「古き話だが事実だ。」

「俺は五百年も眠っていたのか…。」

暗い横顔…。

五百年も眠ってしまうなんてどんな気持ちだろう？  
一晩で世界が変わる。

「ようやく封印が解けたのだ。ゼンと共に鱗を探せ。」

は？

何を突然？

「少年と共に旅をせよと？」

「そうだ。母様の占いに出た。バテバリーギ様も、そう望んでおられる。」

バテバリーギ…か。

「…でも、そもそもはバテバリーギ様と戦おうとした少年が悪いんです。断ります。」

なんであたしがこんな餓鬼と二人旅？

いくらかわいそうだからってそれとこれは話は別。

ちらつと隣を盗み見るとひざまづいていた。

なにしてんの？

「僭越ながら申し上げます。鱗は私にとって力の結晶。共に探して下さるというお気持ちは有り難いです。ですが、我が身の為に他人の手を借りるなど、もっての他。お断り願います。」

うわっ!!

こんな堅苦しい言葉、どこで覚えたのよ少年？

「そうか。ならば私も願おう。」

このおやじ、ゼンがひざまづいたりなんかするから調子に乗ってるよ。

「我らアCONS家はバテバリーギ様の血に恥じぬよう、十六で一人立ちし、己を磨くのだが、我が娘は自分の住む場すら守ることが出来ないようだ。旅で鍛えてやってくれ。」

「しかし…」

行け少年!!

父様をやつける!!

「魔物一匹倒すだけでその様子ではこれから大変だ。せめて無傷で倒せるようになるまで娘を側に置いておけば良い。不必要と判断すれば捨ててかまわん。」

やっぱり父様は家の繁栄しか考えてない。

「ですが…」

「足手まといにはなるまい。なあシーナ？」

なによその言い方!



「当たり前です。魔物一匹など大したことはありません。」

本当は魔物と戦ったことないけど！

「それならばよい。」

…しまった！！

乗せられた…。

口のうまいおやじ！

「ゼン、我が家にある鱗を渡そうか。」

「はい。是非。」

そうやって物で釣る。

はあ。

何でこんな餓鬼と。

三、どもるなあたし！！

「ありがとうございます。また是非私共の宿をご利用ください。」

こつも豪華な接待だと調子が狂う。

「は、はあ。」

原因はもちろんお金。

父様が旅費として無理矢理少年に渡したお金。

でも実際は養育費だと思う。

他人の手助けを嫌う彼は、それをこの宿の主人に全部渡してしまつた。

…もつたいない。

あたしでもあれほど高額なお小遣いもらったことない。

「あ、待つてゼン！」

突然少年はあたしをおいて駆け出す。

…何か追つてる？

「ゼン！！」

何見てるの？

振り返った少年は、ため息の出そうな顔。

「今、鱗の気配がした。」

「え？そんなの分かるの？」

「強い能力がある鱗ほど分かる。…見失った。」

悔しそう。

「ゼン…」

「何だ？」

「バテバリーギを今でも恨んでる？」

「当たり前だ!!」

少年には似つかわしくないその表情にあたしは恐怖を覚えた。

「…そうだよね。」

そのくらい分かってる。

あたしも奴が憎い。

あたしから妹を奪った。

イユを…。

でもゼンは計り知れない量の時間を奪われた。

目覚めれば家族も友達も知り合いも誰一人いない。

「あのさ、なんて言えいいのか分かんないんだけど…」

ごめんは変だし、がんばれって何を？

「えっと…」

言葉が出ない。

「おまえが気に病むな。」

「え？」

さつきとは全く違う、優しい顔。

でも先祖が悪いことをしたのに見て見ぬ振りはできないし…。

「おまえみたいな魔法も使えないし人間に気を使ってる奴が、バテバリーギの血を引いてるなんて面白いな。」

少年の無邪気な笑顔。

「なっ！！何よそれ！」

魔法は使えます！

子どものくせに勝手に決めないでよ。

「ほめたんだよ。」

それはどうかな？

「今回の獲物は、北炉の洞窟の白狐。」

ゼンがポケットから取り出した紙。

小さくてかわいい魔物が描かれてる。

「ほくろ？」

「北炉。賞金は二万パシー」

「安っ！！他のにしようよ。」

そんなんじゃ生活できない！！

「それ以外に鱗を持っていそうな奴はいない。」

「それより生活が！！」

「大丈夫だ。行くぞ。」

今まで敵を倒した賞金を合計しても、ぎりぎりの生活なのに。  
父様からの教育費だけが頼りだったのに。

「がんばろう…。」

四、きつとこんな旅に出たからこんな目に遭うんだわ…。

北の森の北炉の洞窟、暗闇にわずかに差し込む光、小さな体に可愛い顔…の魔物。

白い体に三つ又の長い尾はまるで槍。

「わあっ！」

こっちに來たっ！！

「危ない！！！」

他の尾につきまとわれた少年はあたしを助けようと、必死だった。けど遅かった。

あたしの右肩から血がこぼれ落ちた。

「痛っ！」

じわじわと痛みが押し寄せる。

「くそっ！！！」

槍を剣でかわす少年。

この前拾った錆だらけのやつだ。

あたしも戦いたい。

役立たずは嫌！！

魔族の名門に生まれて魔物に傷を負わされるなんて恥！

無意識にあたしの真ん中に集まる力。

初めは微か…そして次第に強くなる。

今だ！！

「光れ！」

あたしの真ん中から一気に解き放たれる力が体中を輝かせた。

「ギユウウ！」

ただ光るだけで戦闘にはあまり使われないけど目眩ましにはなる。  
でも…また言葉に頼ってしまった。

魔族の恥…。

ゼンは、動きの鈍くなった魔物小さな体を一突きした。  
魔物は悲鳴も上げず動きを止めた。

ゼンは一際長い尾にめり込んだ鱗を引き剥がした。

「バカ！！下がってろって言っただろ！？」

ゼンが私の左手を引き光の方へ駆け出した。  
本家にあつた鱗のせい、少年は強くなった。  
でもあたしは今だ解放されず…。

しばらくの間少年と旅して分かったこと。

少年は大人だ…。

認めたくないけど！！

なんか話し方も落ち着いてるし、妙に色気がある…って言うたらあたしがまるで変態じゃない！！

ゼンは外に出るとすぐに自分の服の腕の部分を引きちぎってあたしの右肩に結びつけた。

「あ、ありがとう。」

「もつと周りをよく見る。」

なに？そのため息？

「見てたわよ！」

「じゃあ避けなかったんだな。」

「うるさい。」

確かに今まで足手まといにしかなくてなかったけど…。  
奴は捨てぜりふを吐くと取り返した鱗を飲み込んだ。  
少年の華奢な体が少し光って見えた。

「やっぱり。これも違う。」

自分の手のひらを見て、かなりの不満顔。

「何が違うの？」

あんたの鱗でしょ？

「…まだ教えない。」

「なっ！」

何よそれ？

しかもその企みのあるような笑顔は何？  
その手には乗らないんだから！！



「別に？知りたくなんかないわ？」

すごく知りたいけど…。

「どつちにしろ教えない。」

楽しそうに、ニヤリと笑った顔。  
こんな皮肉な奴見たことない！

「それよりその傷、早くふさがないと。」

「大丈夫よ。」

そんなに申し訳なさそうにしくなくても、ゼンは悪くないのに。

「痛いだろう？」

するりと少年の手があたしの手を掴む。

「い、痛くない！」

…痛いけど。

っていうか、その上目遣いはなしだよ！！

「それに魔族の血は魔物の好物だ。大量に寄ってこられるのは困る。」

「まあね。」

ん？

ちょっと、いつまで手つないでいる気？

「近くの医者に行くぞ。」

え？

近くの医者…

ちょっと待って!!

それは困る！

五、…誰？

強制連行されて、着いた場所はやっぱりそう。

「あら？シーナ？怪我？」

あたしの一番年上のシュリス姉様。  
ブロンドの胸あたりまでのばした癖のある髪。  
綺麗な顔だち。

その姉様の病院兼、家。

ここら辺では一番腕のいい医者。

「なるほどね。母様も何であんたを選んだのか。」

お茶を淹れる姉さん。

腕がいいから怪我は会って五秒で直った。

やっぱりシュリス姉様はすごい。

そして久しぶりだからお茶でもいかが、って言われて上がってしまった。

でも、久しぶりすぎて気まずい。

「あ、アCONS家は代々修行のために鱗を一つずつ借りる事が出来るのよ。」

「それがなに？」

知ってるよ。

「あたしも持つてるわ。」

当たり前じゃん。

鱗は…

「あ、そつか。初めから姉様達を探せば良かったんだ。」

「気づかなかったの？」

「つまりシーナの姉妹を探せばいいわけか。」

お茶を優雅に口に運ぶゼン。

「じゃ、取ってくるわ。鱗に付けた封印も取らなきゃ。」

姉様が立ち上がった。

「何で気づかなかったんだ？役立たず。」

「何ですって？」

ゼンめ！！カチンと来た！

「そんなこと言ってたらあたしの持つてる鱗あげないんだからね！」

「まあまあ。痴話喧嘩？」

あたしの後ろを姉さんが通り過ぎ、部屋から出ていった。

「あたしサポートしたじゃない！！」

「ただ光るだけ。」

くっ悔しい!!

子どものくせにその勝ち誇った笑いがっ!

しかも魔法を言葉に頼ってしまったからよけいに反論できない!!

「役に立たないなら置いていきなさいよ! あたしあんたと連む気無いから。」

途端に目つきを変えたゼン。

ちよいちよいと一本指であたしを引き寄せる。

「何?」

少年の綺麗な顔。

「そんなもつたいたいなこと出来るか。」

耳元で囁く。

「…えっ?」

「おまえ、本当に面白い。」

にやりと笑ったゼンの顔が、急に大人に見えて顔が熱くなる。

「俺の鱗はお前が持ってる。」

「お待たせ。鱗持ってきたよ。」

丁度良く扉が開いた。

「鱗なんか使わなくてね。本家に返しに行く手間が省けてよかったわ。ありがとう。」

戻って席に着く。

「やっと出会えた。」

ゼンはそんなことお構いなしで鱗に夢中だし。

「そんなにこの鱗が？」

手渡された鱗を直ぐに口に運ぶ。

「当たり前だ。」

ゼンの体が光る。  
今日は二回目だ。

「ん？」

さつきより明らかに強い光を放つゼン。  
光が部屋を闇のように包み込む。

「眩しい…。」

あ、光が消えた…？

「…誰？」

目に見えるのは透き通る青い髪の男性。  
目鼻立ちの整った顔。

わずかに残る少年の面影。  
ゼン？

「お前のその反応が見たかった。」

## 五、…誰？（後書き）

あのう…今更なんですが、読んでいただき、ありがとうございます。

（＊＾―＾＊）

あなたのその目を通して思ってた下さる心が何よりの至福です。 m

（――） m



六、ああもう！！訳分かんない！

「お前のその反応が見たかった。」

低くて男らしいドキドキするくらい綺麗な声。  
笑顔には少年の面影が残る。

あたしより年上の人。

「服が使い物にはならないわね。」

姉様の言うとおり、破れてあちこち裂けてる。  
机で下半身が見えないのが救いだわ…。

「しょうがないわね。」

シュリス姉様が目を閉じると一瞬にしてゼンが服をまとった。

「あたしの男友達の古い服。あげるわ。」

姉様は良い年して男女共にたくさん友達が居るのに独身。

こんなに綺麗なのに結婚できないのはなぜだろう？

っていうか、勝手にあげていいの？

似合うけど。

白いシャツに黒い綿のパンツという楽な格好なのに、なぜか気品が漂う。

そしてその髪と瞳の青。

「ゼン？…だよな？」

「ああ。」

「一体いくつなの？」

「二十一歳。」

ヨルス姉様と同じ！？

「なんで？」

いきなり…

「シーナ、ゼンはね…一、バテバリーギに変化で竜にされた」  
自慢げに人さし指を突き立てる姉様。

「二、竜にとって能力である鱗を奪われた。」

今度は中指も。

「三、石にされたのよ？」

薬指もたててにこやかに笑う。

「知ってるよ。それで石のまま五百年眠ってた。」

それくらい昔教わった。

「そうね。じゃあ、竜が最も得意とする人間の擬態は？」

え？何だっけ？確か学校で習ったはず…

「あ、”少年”。」

「そう。今までは竜だった。そして今の鱗はゼンの肉体という能力だった。肉体を取り戻して呪いが解けたのね。」

呪いが？じゃああたしは…！

「いや、解けてない。姿は取り戻したが呪いはかけた本人しか消せない。」

「まだ呪いがあるの？」

解放されたと思ったのに。

「鱗だ。呪いが解ければ一気に俺の元へ集結する。それにまだこの状態じゃ、竜の体と人間の肉体を一つの魂でつなぎ止めていることになる。」

えっと…難しくてよく分かんない。

バテバリーギめ、余計なことを…！

「呪いを解く方法はあるわ。バテバリーギはまだ生きているもの。」

「姉様…！」

まさかイユのことを？

「アCONS家は代々一人をバテバリーギに捧げるの。魂の器として。」

」

「姉様！！」

「今はそれが末娘のイユ。シーナの双子の妹。」

「だめ！」

「でもまだバテバリーギは覚醒前よ。直接話してみると良いわ。」

あたしの反応を無視して淡々と語り続ける姉様。

「バテバリーギ…」

またあの目…

「やめて！イユを傷つけないで！！」

お願いだからこれ以上は！！

「ごめんなさいね。シーナはイユの事となると…」

「…ごめん。」

いつの間にか涙まで落としてしまっていた。  
ゼンはそんな人じゃないって分かっている。

「ゼン、とりあえず鱗をある程度集めてからにしないで。覚醒前のイユはかなりやっかいよ。」

「わかった。」

イユはあたしの双子の妹。

10歳でバテバリーギの器になった。

「とりあえず今日はうちで休みなさい。明日トピシーの家まで飛ばしてあげる。」

移動魔法も使えない落ちこぼれのあたしのせいで、奴に選ばれてしまった。

七、姉様：そこまで興味なかったのね。

トピシー姉様はシュリス姉様とは正反対の男たらし二十八歳。今日もばつちりメイクしてて。

誰かドピシー姉様の素顔を見た人はいるのかな？  
姉様は頭の良い何でも屋。

「で？その男は？」

いつものように煙草を吹かしてえらそうにソファに横たわる。

「だからバテバリーキに呪われたゼン…」

さつき説明したじゃん！！

「それは聞いた。そうじゃなくてあんたの男なのかってこと。」

「違う！！」

何でそうなるの！

「そこまで否定することないだろ？俺はお前が好きだ。」

え？ちよつと！！何普通に言ってるの！？

「あら？じゃあ口説くのは無駄ね。」

「えっ？あの…。」

あたしの意見は無視？

っていうかトピシー姉様は、本当に男にしか興味ないの？

「まあ良いわ。本題に入るわよ。」

「鱗はね…」

姉様の言葉でその場にいる全員が固唾を飲む。

「あげちゃった。」

「なっ！！」

「だって必要ないし。」

確かにシュリス姉様もトピシー姉様もツタ姉様もヨルス姉様も、あたしの姉様達はみんな鱗を必要としないくらい力がある。

大切に鱗を肌身離さず持ってたのはあたしだけ。

効果も何もないけど、持てれば優しい気持ちになれて安心できた。

「でもあれは…」

「分かってるわ。」

うわ、面倒くさそう。

「今はどこにある？」

「カフレイ山奥に住む一人暮らしのおばあちゃんよ。依頼されてね。あげちゃった。」

「カフレイ山って…」

確か…。

「飛ばそうか？」

え？

「頼む。」

「でもあそこ急斜面だから帰りは気を付けてね。」

やっぱり。

「大丈夫だ。」

ええっ絶対無理！！

「じゃあ飛ばすわよ。」

あたし移動魔法使えないんだってば！



ハ、違う違うー！意識なんてしてない！ただちょっと混乱してると言っか…

突然目の前に現れた木の群生に一件の山小屋。

「おや？何じゃ？」

「こんにちは。」

花の手入れをしていたおばあさんが振り向いた。

「鱗を返してもらいたい。」

「ゼンそれは会って直ぐ言うせりふじゃない。」

でも目は真剣だし。

綺麗な瞳。

「はて鱗？……あ！ああ、トピシーちゃんのプレゼントかい？あれは孫にやっちまったよ。」

「ええっ？」

またなの？

「きらきらして綺麗ねって喜ぶもんだからねえ。」

そっついながら、花の周りの雑草を引っっこ抜く。

「ばあさん、孫はどこにいる？名前は？」

低くなったゼンの声…

って…！あんなこと言われたからって、いちいち反応しないの！あたし…！！

「名前はトゥールじゃよ。トゥールはカフレイ山のふもとの繁華街に住んどつての。自慢の孫でねえ…あの子は踊り子をやっとるんじゃ。ちよつと踊れば人が山のように集まってるの、なにより忙しゅうてもわしに会いに来よる。ええ子じゃ。」

孫自慢…。

「トゥールね。」

「直ぐに山を降りるぞ。」

「ええ？」

今から？

疲れたんだけど。

「あれ？おばあちゃん。お客さま？」

突然目の前に現れた巻き毛の女の子。

「トゥール…！また来てくれたのかい。その人達はお前に用があるんじゃない。」

後ろからうれしそうなおばあさんの声。  
やっぱり孫か。

「トウル。」

ゼンのきれいな声が響く。

あたしの名前を呼んでいるわけじゃないのにドキドキする。

「何ですか？」

可愛らしく顔を横に傾けると染められたピンクの髪が揺らめく。

「お前の鱗をくれ。あれはもともと俺の物だ。」

トウルに差し出された手は大きくて細長くて男らしい角張った手。

「ただでは譲りませんよ？」

いたずらそうに微笑む顔はあたしを不安にさせた。

丸、ゼン、ゼン、ゼンって何なのよ？

「ゼーン今日も公演なの！！ボディーガードよろしく！」

「ああ。」

腰にさびだらけの剣をさげる。

ゼンは今日もトゥールの護衛。

何でも最近女の子をねらうキス魔がいるらしく、この公演期間の護衛を任かされた。

鱗と引き替えに。

毎日の公演。

しかも朝出るとあたしが眠った頃に帰ってくる。

夜も一人でどこかに出歩いてるみたいでいつも眠そう。

「この衣装で踊るのよ！！綺麗でしょ？」

衣装を身にまとったトゥールはそれはそれは綺麗な体。

やせて胸も腰もないあたしとふくよかで胸も腰もある彼女。

普通、男ならトゥールを取るよね、絶対。

でもあの二人が並ぶと妙にイライラする。

トゥールはどこから見てもゼンにベタボレだし。

あたしは危ないから出るなって言われて宿にずっと一人だし。

宿はトゥールの顔利きの店で無料だから困らないけど。

ゼンの判断に任せるしかないの？

なにかあたしにできることがない？

「シーナ。」

久々に聴く声。

「おはよう。」

延びた手があたしの頬をなでて輪郭を作り出す。  
その一瞬の手の動きがあたしを天上へと導く。

「お、おはよう。」

ゼンの柔らかい眼差し。

最近会ってなかったからどう関わればいいか分からない。  
心臓が跳ねて目を合わせられない。

「行ってくる。」

その言葉を残して出て行ってしまった。

そうだ！

何で気づかなかったんだろう？

あたしも公演に行けばいいんだ！！

あたしなんて別に誰も狙わないでしょ？

そうだ行こう！！

すぐに公演の会場へ行くゼン達の後を追った。

後ろ姿を追いかけて、追いかけて追いかけて、追いついたのは小さな噴水のある広場。

「ゼン！！」

振り返ったゼンは、あたしをまじまじと見て…怒ってる？

「何で来た！？」

「あたしも行く。」

「ゼン一人で十分よ帰って。」

なによ？

えらそうに！

「あたしが足手まといだとも言いたいの？」

「そうよ。」

見下すんじゃないわよ！

「何ですって？」

「わかった。ついてこい。」

ほら、あたしだって役に立つんだから。  
あれ？

「ゼン？」

動きが止まった。

「鱗の気配だ。」

「私の？」

肌身離さず鱗を持ち歩いてるあんたの鱗に、ゼンが反応するわけな

いじゃない。

まあ、あたしのも違っだらうけど。

「僕のかな？」

誰？

今、気配がなかった。

「魔物か。」

あたしのすぐ隣に立った人。

赤い髪に赤い瞳。

前のゼンみたいに、あたしの肩にも満たない背格好。

笑顔の青年。

見た目は人でも魔の気が漂う。

「魔物？」

ゼンの横にいたトゥールの顔が白くなった。

「これでしょ？」

差し出した手の中には…

「ゼンの鱗。」

「返してあげようか？」

笑顔を絶やさない顔からは気持ちを読めない。

「取引か。」

「そ。僕ら人型は人間と戦うには強すぎる。」

赤い瞳がゼンをとらえる。

そして次はトゥール。

「その魔族は魔力なんて無いに等しいし、」

ほら！

トゥールの方が役立たず！

って、視線が交わっただけで気絶しそう。

大丈夫かな？

「この魔族は自分の巨大すぎる力を扱いきれてないみたいだし。」

肩にぽんと手を突かれた。

「シーナに触れるな！！」

わっびつくりした。

「だ、大丈夫だって！」

敵意むき出しって感じでもないし。

でも、巨大な力？

あたしに？

そんなわけ無い、でたらめ言ってるの？

「だから君の魔力が欲しいな。」



「え？それだけ？」

魔力なんてすぐに溜まるのに。

「良い条件でしょ？」

それで鱗が集まるなら。

「交渉成立ね。」

「だめだ。」

慌てて、あたしと赤い笑顔の魔物の間に入るゼン。

「なんで？」

良い条件じゃん？

「こいつがキス魔だ。」

えっ？

何を根拠に？

「よく分かったね。僕、魔力の回復が遅いから。どこから調達しないと。」

暢気な魔物は一人でペラペラ空に向かって話す。

「人型は魔力を口から吸い出す。」

ええっ？

「知らなかった。」

危うく魔物とキスするとこだったよ。

「折角だから魔族の女の子とキスして一石二鳥。みたいな感じだよ。」

まだ喋ってる…。

「それで何人が迷惑したと思ってるのよ。」

この町の人にゼンにあたしに一応トウル！

「ま、魔力がもらえないなら良いよ。今回は回復するまで眠る事にするよ。」

って、話聞いてないし！！

「あ！ちよつと！」

移動魔法でどこかへ行ってしまった。  
最後まで笑顔。

ああ言う顔なの？

「良かった。」

ゼン！

「良くないよ!!」

鱗が!!

「よかった。」

ガクンと膝を地面に付けて放心。  
トウール、魔物がよっぽどこわかったのね。

「シーナ。」

「え?」

肩が急に重くなったと思ったら、睡眠不足のゼンの頭があった。

「ちょっとまって!」

だんだん重く…

「ゼン起きて!!」

あたしそんなに力持ちじゃないから!!  
っていうか…

…近い。

十、余計な事しないでよ!!

きれいな顔:

向こう側が見えそうなほど澄んだ色を見せる髪。  
閉じた瞳、筋の通る鼻、薄い唇。

「ゼン。」

名前を呼んでも瞳の色は見えないまま。

「ちょっと!!私のゼンに触らないで!」

「あ。」

気づいたら無意識にゼンの手を握りしめていた。

「ゼンといた時間が長いからって調子に乗らないでよね?」

トウル、第一印象はすごく良かったのに。

今はこうしてえらそうにあたしをにらむ。

「あのさ、あたし別にゼンのこと好きじゃないし。」

挑発には乗らないから。

「何言ってるの?倒れたゼンを見て今にも泣き出しそうだったのは誰?」

「倒れたのはあんたが振り回したからでしょ!?!毎日毎日毎日毎日

「！！ゼンがどれだけ疲れたと……」

「そんなに取り乱して、いい加減好きだって認めたら？」

話の途中でっ！！

まだあたしには言いたいことがたくさんあったのに！！

「認めるわよ！！」

あ……。

静寂な時間があたし達を包み込んだ。

「言っただわね。」

もういいや！

「あたしはゼンが好きよ。」

トゥールよりも……誰よりも好き。

「おまえ俺が好きなのか？」

……？

振り向くと呆気にとられている愛しの人。

「あら？ゼンおはよう。」

何？これは夢？

「おはようって……トゥール、おまえが寝たふりしてろって言ったん

「だろ？」

「は？」

「どういうこと？」

「あは。」

「何で満面の笑み？」

「何なんだ？」

「だってあんたたちみててかなりイライラしてさ。特にシーナ。」

「今までとはうって変わって、トウールはまるで初めてあったときのようなあっさりとした表情。」

「おまえ、顔赤い。」

「にやりと笑う顔はなんだか勝ち誇って見えた。」

「見ないで！！」

「布団に顔をつっこむ。」

「あー何で言っちゃったの？  
全てトウールの思うつぼだわ！」

「ま、あたしの趣味が恋のキューピットで良かったわね。」

「良くない。」

よけいなお世話！！  
そして変な趣味！

番外、え？……あ、ありがとう。（前書き）

突然ですが、いつも読んで下さって有り難うございます。  
（\*ハ―ハ）



番外、え？……あ、ありがとう。

あるの日宿屋でのこと。

ゼンはあたしをおいて、一人出かけてしまった。

今日はトゥールの公演はないのに。

あたしの部屋に顔を出して、

「ちょっと行ってくる。」

って…どこに？

天気もいいしあたしは散歩にでも行こうかな？

あ、そうか。

変な奴がうろついてるから出るなって言われてたんだ。

「暇だな。」

かといってトゥールと会話を楽しむことはあたしには出来ないし。  
また一日中、宿にあるつまらない本を読む羽目になるのかな？  
本棚を見るとそれはそれは魅力のかけらもない背表紙が…

” 経営者の心得 ”

” 経済力のすべて ”

” 宿にかける思い ”

” 季節の絶品料理 ”

読めそうなのはやっぱり ” 季節の絶品料理 ” だね。

ページを開くと見慣れたごちそうが並んでいる。

はじめのうちは美味しそうだったけど何度も見ると飽きてくる。  
あたしが好きな本はもっとうとう…物語のある話のものよ。

友情って素敵！！

みたいな本。

…無いわね。

ああ、暇。

突然扉をたたく音。

トゥールかな？

扉を開けるとそこには透き通る青い髪の人。

「シーナ。」

「ゼン！！お帰り！」

やっと帰ってきた！

「遅い。」

「は？ たったの10分だぞ？」

え？

時計は確かに事実を示していた。

「まあいい。ほら、おみあげ。」

差し出された一輪の白い花。

「見つけたらシーナに見せたくなくて、戻ってきた。」

「ありがとう…。」

手に渡された小さな花。

ふいにゼンの顔が近くなった。

「わっ！！何？」

「何でもない。」

その瞬間頬に唇が落とされた。

「ばか。」

何があってもないよ！

勢い良く扉を閉めて、赤い顔を隠しているあたしがいた。

手には一輪の花。

番外、え？……あ、ありがとう。（後書き）

短編の、「名も無きもの」「まほうつかいとつき」も、よろしく  
お願いします）、（づ  
図々しいですね……すいません（\*——\*）

## 十一、あたしが？

あたしの思いがばれた直後、トウルはあつさり”じゃあ”と別れを告げて、あたし達をツタ姉様の元へ送った。

それにしても、なんだかよく分かんない奴だった。恋のキューピットが趣味って変だよ。

ツタ姉様は久しぶりに妹が自分の家に居ることに驚いて、何度か扉を開け閉めしてやっとなあたしを認識した。

「なーるほどね。あんたがゼン。」

ツタ姉様は、いつも短い髪を頭の後ろ高くにまとめて赤い額当てをしている。

もちろん姉様はあたしが説明しなくてもゼンの存在を知っていた。

姉様は父様さえも頼ってくる情報屋だ。

でも、確かに頼りになるけど変わってる。

姉様の部屋は、大ざっぱな性格を表すように汚い。

仕事で使ったらしい資料とか武器とか山積み。

「鱗はここ。」

小さな袋からざらりと鱗がこぼれた。

「こんなに？」

アCONS家が渡す鱗は一枚のはず…。

「家が未回収だったものとか、近所の迷惑な魔物とか、その辺からパクってきた。」

姉様…。

相変わらずやるのが早い。

「わざわざ悪いな。」

ゼンが鱗をつかもうとする。

「あ、ゼン！」

「触るな!!」

ゼンの手が威勢のいい音と共に弾かれた。

「何だよ？元は俺の物だ。」

「知ってるよ。でも集めたのはあたし。その文の代償はいただくわ。」

にかつと笑う顔は全く悪気のない気持ちが良く伝わってくる。

「さすが、これこそ姉様…。」

「あら、ありがとう。」

このさわやかな笑顔。

「代償は何だ？」

でもゼンはそれに全く動揺していない。

「おもしろい情報はない？」

「具体的には？」

「まあ、個人的には噂話が好きだけど、政治の話は儲かるから助かるね。」

「噂ではこの国のプスー大臣は秘書とできているらしい。」

「何それ聞いたことないわ！！詳しく教えてくれる？」

プスー？

あたし政治経済には興味ないからな。

ていうか、その情報は信用出来るの？

五百年眠ってたのに。

二人は話を盛り上がるだけ盛り上げた。

あたしにはさっぱりの話に大満足の姉様は、鱗をすんなり手放して、新しい情報までくれた。

あとで姉様は泣くかもしれない。

「あたし、どうしても倒せなかったんだけど、人型の魔物で確か名前は…。」

「ラークラ。」

姉様の後ろに突如として現れた赤い髪。

「僕の事でしょう？」

かわいい笑顔で細めた赤い瞳。

「おまえは…」

飲み込もうとした鱗を手からこぼすゼン。  
気構える姉様。

この前の人型だ。  
でも…

「背のびた？」

前はもつと小さかった。

「そうだよ。僕は成長期を迎えて、魔力も右肩上がりだよ。」

相変わらずの笑顔だけど、成長を喜んでるみたい。

「だから戦う楽しさが分かってきて…姉さんが遊んでくれて嬉しかったよ?」

姉様に向けられたその笑顔は挑発?

「おまえ鱗は?」

面倒くさそうに鱗を口に運ぶ。

「あげても良いけど遊んでよ?」

「ラークラ、ここで暴れないでよね。」



まあ、そう言うのはもつともだけど…

「暴れた方が綺麗になるんじゃない？」

「あたしもそう思うわ。」

ラークラ、成長期をむかえて人の話を聞けるようになったのね。

「うるさいわね。」

「俺はおまえの遊びに付き合う気は無い。」

ゼンが最後の一つを飲み込む。

「竜に勝って自慢したかっただけなのに。」

「俺は人間だ。呪いで竜にされた。」

「うえ。人間だったの？まずそう…。じゃあいいや。」

ラークラは苦いものでも食べたような顔。

初めて見たよ。

笑顔以外の顔。

「仕方ない。帰る。」

ラークラはあつと言う間に去って行ってしまった。

十二、あたしはヨルス姉様があんなに機敏に動くのを見たことがない。

次に送られたのは、あたしが一番会いたくなかったヨルス姉様。

何と言ってもこのマイペースがあたしの波長とイマイチ合わない。

茶色い髪にイユのように真っ直ぐな髪。

前髪も長くのばした後ろ髪も規則正しく並んでいる。

この人がゼンと同じ年だなんて信じられない。

「シーナちゃん。」

とりあえずあたし達をテーブルに座らせて一言。

「あのね…」

このいつも眠そうな顔もついていけない。

「何？」

「このままだとイユちゃんが危険よ。」

「イユが!？」

私の片割れ!!

「どう危険なの？」

あたしはこんなに焦ってるのに、となりのゼンは落ち着いてる。  
まあ、ゼンには興味の無いことだろうけど。

「覚醒出来ないかもしれないわ。」

「覚醒なんて…」

しなくていい。

覚醒したらバテバリーギに体を与えたも同然。

「覚醒しなかったら人間を見る度におそうのよ？ゼンさんが落ち着いて話せないわよ？」

それじゃ、呪いが…

「構わない。シーナが傷つくよりましだ。」

あたしはゼンの過去かイユの未来かなんて決められない。

「そう？じゃあ話は早いわね。あたしが借りた鱗を返すから、二人でイユを覚醒させなさい。」

ヨルス姉様は機敏に！

それはもう機敏に！！

ゼンに鱗を渡してあたし達に魔法をかけた。

イユの元へ。

十三、イユ！！

イユがいる。

目の前に。

合うのは八年ぶり。

イユがバテバリーギにとりつかれて以来隔離されて、合うことは許されなかった。

イユのことを忘れたことはないけど…

「人間か。」

声も髪も仕草も、すべてがバテバリーギのもの。

ストレートの長かった髪を乱雑に首の付け根で切り捨ててある。

目の前にいるのはイユじゃない。

「死ね！！」

綺麗に育ったイユは、そのシュリス姉様にも似た綺麗な顔を歪めて、  
繊細な指をかざしてゼンを倒す為に魔法を使う。  
燃えたかる炎に降り注ぐ氷の刃。

「バテバリーギ！目を覚ませ！！」

ゼンはただそれをよけるだけ。

「イユ！！やめて！」

「無駄だ！！娘は私に支配されている！」

イユは見えるし聞こえるし感じることも出来る。  
でもバテバリーギとしか話せない。  
バテバリーギはなんだかすごく苦しそう。

「イユ!!」

あたしはどうすればいいの!?

「やめて!!」

あたしと同じ黄金の瞳で、ゼンをにらむ。

「人間が…ゼンが何をしたって言うの?」

イユの体が動きを止めた。

「……ゼン…?」

「イユ!?!」

「シーナ、おまえ…光って…」

「え!何で?」

気がつけばあたしの指先から頭まで黄金の光を纏っていた。  
無意識に魔法を使っていた。

「やめろ!!!来るな!!」

イユの瞳が光を失った。

反対にあたしの体は光を増す。  
あたしは段々意識が薄れていく。

「イユ…。」

イユの瞳に明かりが灯った瞬間、あたしはこの八年聞いていなかった声を聞いた。

「シーナちゃん!!」

十四、ええええつ…！？あたし？

イユ！！

…声が出ない。

イユ！

…何で？

「イユ…」

出た！！

「とこの女が言っているが？」

あたしの意志を無視して言葉が次々と出る。

「おまえがイユか。」

あたしの目がイユを捉えた。

「…シーナちゃん？」

「シーナ。」

「お前は…！！！」

あたしのゼンを見る目が険しくなる。

”まさか…ゼンか？”

誰かの声！？

「イユよ、覚醒前の私が失礼した。」

目を見張るゼンに涙目のシーナ。

でもこの動きはあたしの意志じゃない。

もしかして…バテバリーギ…！

私が選ばれた？

なんで？

「あいつは私の若い頃の記憶しか持ち合わせていないからな。」

「何でシーナちゃんを選んだのよ！？…シーナちゃんが…シーナちゃんか…」

イユ…。

「仕方のないことだ。イユの体が、覚醒前の私と竜との戦いに耐えられなかったんだろう。」

そう。

もう二度と見たくない。

「バテバリーギ…貴様二度も…」

ゼンはあたしから顔を背ける。

「お前には本当に申し訳ないことをした。」

「それがシーナに取り付いて吐く言葉かつ…！」

あたしが今まで見たこともない顔で…あのときよりも怒りに満ちた



顔で、あたしを見るゼン。

その瞳からは綺麗な涙がこぼれていた。

「ゼン。」

あたしの声が出た。

「なかなかやるなこの娘は。」

また違う言葉、勝手に笑う顔。

「貴様!!」

「私はお前を呪いから解き放とう。忌々しき過去の過ちを許せとは言わない。だが私はこの為だけに、子孫を犠牲にし、自らの精神力を削り、存在を保っていた。」

あたしの頬を伝う涙。

”悔やんでも悔やみきれなかった。どんな謝罪の言葉も足りない。バテバリーギ…”

「今解き放とう。我が過ち、この魂と共に消し去らん!!」

十五、さようなら……。忘れない。

「さらばだ。」

あたしの口から放たれた言葉を最後にバテバリーギの気配が消えた。

「シーナちゃん。」

それを悟ってか安心した表情を見せるイユ。

いつの間にか、ゼンの周りには無数の鱗が集まっていた。

鱗はゼンに向かって貫く勢いで突き進み、溶けていった。

呪いの解けたゼンの髪は、茶色く染まって、ゼンの、人間の持つ本来の美しさを纏っている。

「シーナ。」

そんなことにはお構いなしであたしを呼ぶ声。

「ゼン。」

ゼンの腕に吸い込まれるように包まれて、これほど幸せなことは無いと感じた。

「シーナごめん。」

でもゼンは悲しみでいっぱい表情だった。

「俺の、人間としての体は五百年も、保たなかったみたいだ。」

ゼンがかざした指が、薄く透けている。

「どういう…こと？」

尋ねておいて、答えは聞きたく無かった。  
何となく分かっていたから。

「今まで竜だったおかげで俺は生きてこれた。竜の呪いが解けた今、俺は…もうもたない。」

どんどん薄くなる影、かすれる声、苦しそうな笑顔。

「じゃあなシーナ。俺のことは……忘れる。」

切ない瞳が近づく。

「ゼン!!」

唇を寄せた瞬間、ゼンの姿は消えた。

消えてしまった。

あたしに残ったのは、この気持ちと、ゼンが残した鱗だった。

あれから何年の時が過ぎただろう。  
姉様達は相変わらずそれぞれ自由にしてるみたいだし、イユは家に  
戻って魔法の特訓に励んでいる。

あたしは、もう鱗を持ち歩かなくなった。

あのゼンの残した鱗は、慰霊碑の中に眠っている。

アコンス家の先祖であるバテバリーギの過ちを残すために、父様が  
たてた碑。

今日もあたしは花を供える。

いつかゼンに貰った花のように、あたしの気持ちと共に渡す。

「忘れる……なんて、最期の最期に嘘つかないでよね。」

あたしは絶対に忘れない。

また会えるその日まで。

十五、さようなら……。忘れない。（後書き）

最後までお付き合い下さった方も、飛ばし飛ばしご覧下さった方も、有り難うございましたm(u|u)m  
未熟で読みづらい文を、最後の最後まで読もうとして下さったあなたの意志が、何よりありがたかったです(<|>。)

余談ではありますが、私はこの話の中ではラークラがお気に入りです。

ちなみに「まほうつかい」と「つき」では、まほうつかいの、まほうつかい。

「名も無きもの」ではルートくん。

って、本当に心底どうでもいい話ですね(。。(

ここまでお付き合いいただき、有り難うございました。

今はまた違うお話を考えています。

基本的に書きあげてから投稿するので、未完はありません。

ですから、気が向いたらまた、遊びに来て下さい(\*^ー^)  
有り難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5103c/>

---

竜の少年

2010年10月13日17時01分発行